

## 金色のカメ

毎年同じ時期に、大陸に挟まれた小島に全国の動物や妖精が集まり、ある問題を相談する会議が開かれます。”私は、”アフリカの小さなある国の代表として参加したへびは（朝靄の中）“少し言いたいことがあるのですが。”と、切り出しました。へびは満足げに周囲の参加者を見渡しました。“ウ～、ウ～”エジプトのワニはあくびをしながら、休憩時間には十分に休めるように発言内容の準備を始めました。“日常、直面している問題は・・・”一方、へびは周囲に気兼ねせず、ヒューヒュー音を出しながら自分の話を続けていました。”お互いを理解していないということです。高い教育を受けたものの中には、二ヶ国語を話せる者もいるけれど、普通の者は違います。”

動物たちはこの種の問題には触れたがりません。それは解決策のない問題を考えることは、不快なことであるからです。この問題が提案されたことで、彼らはいらだててきました。アイルランドの山の精は、”それで？“といらいらしながら質問して、座るために金色の瓶を裏返した。（世界的な経済不況のせいでたった一つのボタンしか入ってなかった。）”私たちは、もうその問題を解決したでしょー。”それは違う。“風邪をひいたネッシーの代わりに参加したスコットランド高地の羊は言いました。”私たちは重要な連絡事項も伝達できないのです。雨林のコアラは他の雨林で火事が発生していることも知らないのです。魚は他国から流れてくる汚染物のために死んでいきます。なぜなら、迫りつつあるオイルペストについて彼らに伝えられないからです。そして私たちは毎年、会議用の言葉を選ぶためにくじ引きをしなければならないのです。そのような状態でも、問題は解決！と言えるのですか？“羊は語気を強めるために、いななきました。そして横になりました。

暫く沈黙が続きました。この怠け者の羊に対して、ある動物の中には、敵意を持つものもいました。その時、突然に決然とアラビアのライオンが現れました。”俺たちライオンの言葉を使おう。”大きな足を持ち上げ、その鋭い爪を誇示しました。“俺たちは一番強く、速く、危険なのだぞ。強いものが勝つという自然の掟があるだろう。そうすれば、皆の問題は解決するだろう。皆が俺たちの言葉を学べばお互いを理解できるじゃないか。”“いや、違う。”トカゲが抗弁した。誰もトカゲがどこから来たのかも知らなかった。“自分たちの言葉を使うべきだ。自分たちは系統樹では、最も古い存在だ。更に、自分たちは祖先は恐竜で、その間にどの言葉が良いのか分かっている。

聞いている者の中から賞賛のささやきが聞こえてきて、トカゲは蔑視の目をライオンに向けた。”なぜ？”と甲高い声が聞こえた。さいが場所を開けてやると、ウサギが現れた。”私たちは多産系だ。私たちの言葉が共通語になっていくでしょう。”ハイエナが笑ったので、シマウマがその口を押さえた。ハエが“自分たちも多産系だ。こちらの言葉を使ってくれ。”とおずおずしながら言った。“自分たちもだ！”ウオンバットとカモシカが同時に言った。“俺たちもだ”とヒョウがつぶやいた。

結局は、誰も譲歩しなくて、自分の言葉にこだわった。

小島に住んでいるので国の代表とは言えないけれど、一匹のカメが遅れてきた。会場付近の最も高い場所を探して、そこに登り、“お黙り”信じられないくらいの大声で言ったので、他の動物たちはびっくりした。子カメは満足して微笑み、挨拶をした。“私とその解決策を持っているよ。”再びハイエナが笑い出したが、たたかれたくないので、すぐ自分の手で口を押えた。

“学習し易い、新しい言語を造ったらいいいじゃないか。”カメは石の上から更に言った。“誰にも不利益をもたらさない言葉が、全ての国に利益をもたらすのだ。”カメは立ち上がっている皆を見た。皆はとほうにくれていた。カメは自分の提案が受け入れられたと感じた。“どのようにして・・・”ゆっくり、腹立ちげにライオンは言った。“その言葉を作るのか？”子カメは誇らしげに足を動かした。なぜなら、会場にユックリ来る途中で熟慮することができたからである。“説明しましょう。”子カメは、長時間話をした。その言語について話せば話すほど皆はその考えに引き込まれた。“すばらしい。”ワニは言った。“驚いた。”ライオンは言った。“皆で子カメに褒美をあげよう！”アイルランドの山の精が言った。“勿論”他の動物たちも賛成した。“しかし、どうやって？”“私がやりましょう。”と大勢の中から声がした。米国から来たハリウッドの妖精が鼻歌交じりに、子カメが座っている石のほうに向けて言った。彼女は、魔法の杖を持ち上げて、呪文を唱えた。すると金色の雨が言語提案者の体に降り注がれ、子カメの体中が金色になった。

“さあ、これで私たちはあなたが最も偉大功劳者だと分かるし、どの会議にも参加できるのですよ。”妖精に皆は喝采した。“何でもないことですよ。”と、妖精はお辞儀をした。そして自分の元の場所に飛んで行った。子カメは石の上で微笑んでいた。そして、この結果にとっても満足していた。

この話は、2003年6月に Katharina von Radziewsky の原作を加藤昭朗が和訳したものです。